

金田城跡

対馬の金田城は 7 世紀後半、唐と朝鮮半島の新羅の侵略から日本を守るために、大和政権が築いた広大な山頂の要塞である。浅茅湾の南端に位置する標高 276m の城山には、高さ 6m にも及ぶ石塁が長い区間で残っている。晴れた日には山頂から朝鮮半島が見える。

663 年、唐と新羅が大和と同盟関係にあった百済を滅ぼし、日本だけが東アジアで唐の勢力に対抗することになったため、大和朝廷はアジア大陸からの攻撃を恐れていた。日本海を渡ってきた百済の士官や技術者たちは、国境の島々や九州、そして敵が現在の奈良県に位置する首都の飛鳥に向かうであろう瀬戸内海沿岸に朝鮮式の城を築くために召集された。

金田城はその最初の防衛線であった。城山は断崖絶壁で西側の防御は容易であり、東側と山頂付近には高い石塁が築かれ、侵入を防いだ。城への入り口は、南側から何重もの門をくぐって、東側の丘の中腹にある平らな部分に通じていた。城に駐屯していた衛兵はここに住み、交代で城壁や山頂を巡回していたと考えられている。

日本への侵攻が実現する前に唐・新羅同盟は崩壊し、金田城の存在意義は失われた。1901 年、日本陸軍の工兵隊が山頂まで道路を敷き、砲台を設置し、近代的な軍事施設に生まれ変わった。現在、山頂までの 2.4 キロのハイキングコースがあり、この道路を使い、古代の石塁のいくつかの部分を通過することができる。天候に恵まれれば 1 時間程度で登頂できる。